



製薬会社の創業者 篇2

くすりの町 道修町

藤澤友吉が設立した「藤澤薬品工業株」は、大阪市中央区の道修町どしよまちに本社を置いていました。上田太郎の「小太郎漢方製薬株」も本社を置いていました。

今も道修町には、多くの製薬会社が並んでいます。なぜ、道修町には製薬会社が多いのでしょうか。江戸時代（寛永年間）、ここには薬問屋が開かれ、その後も多くの薬種問屋が店を出し、享保7年（1722）には、124軒の薬種業者が江戸幕府から公認を受け、薬に値段を付け、全国に売りさばくことが認められました。

当時、薬種の原料である中国産の唐薬種からやくしゅや日本産の和薬種の品質を見分けるのが非常に難しかったため、専門的な知識をもつ業者の検査が必要とされていました。このため、日本で販売される薬は、いったん、ここ道修町に集められ、品質と重さを保証されて全国に流通していきました。このような歴史をたどってきたため、道修町には、現在も多くの製薬会社が本社や事業所を構えています。

また、薬の神様（薬祖神）として信仰が篤い少彦名神社すくなひこながあります。医薬にゆかりのある祭神を祀っていることから、医薬関係者の信仰を集め、病気平癒や医薬業関係の資格試験の合格を願う参詣者も多いようです。

この神社の境内には、「くすりの道修町資料館」があります。江戸時代以降の薬関係の史料・資料が収蔵され、その一部が展示されています。

推古天皇 19年（611）、日本最初の薬獵くすりがりからはじまった「薬の旅」は、道修町が終着となりました。道修町通りを散策し、有名製薬会社の本社を見上げ、少彦名神社や「くすりの道修町資料館」で薬の歴史を再発見してみませんか。

